富士のよせ書き

瓢々巣主人
又ケ 獺祭漁史

和歌 俳句 二

915.
1488h
準貴

国立国会図書館　　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

望不盡山歌一首 并短歌

山部赤人

天地之分時従神左備手高貴寸駿河有布士能高嶺乎
天原振放見者度日之陰毛隠比照月乃光毛不見白雲
母伊去波伐加利時自久曽雪者落家留語告言継
將往不盡能高嶺者

反歌

田兒之浦従打出而見者眞白衣不盡能高嶺尓雪波
零家留

詠不盡山歌一首 并短歌

奈麻余美乃甲斐乃國打縁流駿河能國與己知其智

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』　請求記号 WB12-22
ガラス使用

乃國之三中從出之有不盡能高嶺者天雲毛伊去波伐加
利飛鳥母翔毛不上燎火乎雪以滅落雪乎火用消通
都言不得名不知靈母座神香聞石花海跡名付而有
毛彼山之堤有海曾不尽川跡人乃渡毛其山之水乃當
焉日本之山跡國乃鎮十方座神可聞寶十方成有山可
聞駿河有不盡能高峯者雖見不飽香聞

反歌

不盡能嶺爾零置雪者六月十五日消者其夜布里家里
布仕能嶺乎高見恐見天雲毛伊去羽斤田菜引物緒

古今和歌集　短歌

題しらず　　読人しらず

あふことの　まれなる色に　おもひそめ　我身はつねに
あま雲の　はるゝ時なく　ふじのねの　もえつゝとはに
おもへども　逢事かたし　なにしかも　人をうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　思ひてし　おもひは今は
いたづらに　なりぬべらなり　ゆく水の　たゆる時なく
かくなはに　おもひみだれて　ふる雪の　けなばけぬべく
おもへども　えぶの身なれば　なほやまず　思ひはふかし
あしびきの　山した水の　木がくれて　たぎつ心を
たれにかも　あひかたらはむ　色に出ば　人しりぬべみ

すゞ涼の　ゆふべなれは　ひとりねて　あはれしと
数あまた　せんすべなさに　庭に出て　立居すなれは
志ろたへの　衣の袖に　をく露の　気色はしれぬへし
おもへとも　かをあけられぬ　まもらすに　よそ所になる人り
あはむと思へは
　ながらへすりし時のむしろくれその志うらし
　　はしゆきし
千早ふる　神のみまへ　名れ竹の　よにふれたんず
あまひとの　をとはの山に　春かすみ　おもひこもれて
五月雨の　空にところに　さみだれて　山はしとさきも

あきをふ　なれはねさめて　かそまゝさ　なかはれ山の
紅葉をも　見てのち思ふ　神無月　時なくして
冬の夜の　庭にたまれり　白き雪の　ふるきもへかへり
ともに　時りつけつゝ　あきれてふ　をもいひつゝ
君をのみ　ちよにといはふ　世の人の　思ひすなられ
夏の旅の　てゆる思ひし　あつすて　わか影なるみぶ
菊ころも　をれることろに　匂ちなれ　その葉をふ
すゞきれ　おほせらしこと　まさへれ　本かに流すと
伊勢の海の　浦の塩かひ　ひろひあつめ　とれりとすきと
玉のをの　みしかきいのち　おもひあへす　移ありけれ

そもそも　大富士のね　人からの　ひろ敷くわうす
つらふとて　世りもせぬ　わらやとの　思ふ草おふる
いろまある　ぬるちる雨の　きりやしぬらん　志ら不武
日の本の　やまとのしほに　雅山の　鏡目となれる
ふじのねの　き晴ちる　朝影に　かさ布の垣守
那して　苦難なれば　河雑板　なれとなりま路
海づらに　風こそいふけ　百千浪　千代の山ある
荒磯に　雲そら梢の　志都枝には　吉波よせ来
秀まよ　数かるまつれ　山中の　里志美ゝに

並ち劫く　斗升のなかに　かたみおほ　不二花の峰の
えて　字なくはし　下利根川を　流るき上富士の山
手なめて　ゝ守こそよめる　ことしらかう　あさひさき
やとこきのなる　何州より　不つまけれは
あまのちい　不盡のたねは　ゆく手に
むらひ河山　みれのうちに　いはなんかも
ときのへと　おほふ手の人　かけやはの
すくとみる峰　ゝくれと　人やつくらん

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

隈なへて　ぶやまきんぽまきやうゑに
えうるふかけい　みれそこに　雪のとつもる
ねのへ并　限をしらと　おもふまて
恋しるふとえ　うちよせる　駿河のくにと
しほ川ふかき　やまふ立ぞこそ　へだてつる
くものはるても　忠きちへし　つれてのこそ
たゝわたり　舟よせんとの　むこふ川
山へをはし　まなゝめなる人

友喜

ふしのねは　あふさの國　越へこゆと　その　の煙をふかけそ　ながる

正月ふりり不二の山をよんでよめる　都築士備

なまよとの　甲斐乃出その徐みすかる　ちなぬ乃山は
ちふ雪乃　布隠て　都もれぬ　あなたなる　あ…の山さやの山
かはみたふいち　むら山哉　ふみをみすて天のかりにふくかふ
まふしのねを　ふれさけ見て　むらふみそらし

友喜

あふまは錦や　此来よるを見　後まは　ゆの浦なふかすみ棚びく

不盡の山をよめる　　　仝

打よする　するがの国や　あれは不理　と　ほ川　あふから身から
今かしも　あと不なかれも　むふ山は　理まりて　あれれ

此山の　うへにぬけそへ　あまそ見　出てく見へ多る
ふこのねは　くすしきやまか　みふゆ都来　はるさりくれ者
天のけふり　うきみ立ちこめ　ほいてきま　来る五月の
な川の日も　き過るなく　白ゝ雪　乃　ふりてつもり
もみぢばの　秋のくれは　ふしと侍へは　ちりに坂利
白雲の　ハまこの上に　此の山を　都りさけみれは
いかし侍ふ　以やけるかな　天地の　あひさけ時より
と詠ぬるかな　まろん哉

陽成院の御時　使として甲斐の国にまかりくたりし後になの
みやこし女の人に名立ちてかくてまうて来て　道

しる

壬生忠岑

男やまわの　山をうしろに　うみつ　うしろめくらと
おもひしに　このほそ世への　根かくりいの世世と
うちなきの　あかまの雨を　こやりしに　やもをなさの
たちしのは　はるひにくもし　なぞ嶋の　かふきおれを
するのなる　みのうみと　きもゆれも　ひみとまぬ
みちなれは　たゆ山の神を　うちねぎて　きうてゆくへに
いらりかき(略)

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

和歌門

富士　　萬葉集

安麻乃波良不自能之婆夜麻巳能久礼能等伎由都
利奈波阿波受可毋安良牟

不盡能祢能伊夜等保奈我伎夜麻治乎毛伊毋我理登
倍婆気尓餘婆受吉奴

可須美為流布時能夜麻備尓和我伎奈婆伊豆知武
吉氐加伊毛我奈気加牟

佐奴良久波多麻乃緒婆可理古布良久波布自能多
可祢乃奈流佐波能其登

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

駿河能宇美於思敝爾於布流波麻都豆良伊麻思乎多能美波播爾多家比奴
吾妹子尓相縁乎無駿河有不盡乃高嶺之焼管香將有
妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺之燒乍渡

古今集　読人不知
人しれぬ思ひをつねにするがなるふじの山こそ我身なりけれ
〃　紀乳母
ふじのねのならぬ思ひにもえばもえ神だにけたぬむなしけぶりを
〃　藤原忠行
君といへばみまれみずまれ富士のねのめづらしげなくもゆる我こひ

後撰集　読人不知
恋をのみ常にするがの山なればふじのねにのみなかぬ日はなし
〃　題しらず　平貞文
我のみやもえて消えなんよとともに思ひもならぬふじの根のごと
紀乳母
富士の根のもえわたるともいかゞせんけちこそしらね水ならぬ身は
〃　思ひかける女のもとに　朝頼朝臣
富士の根をよそにぞ聞し今は我が思ひにもゆる煙なりけり
〃　読人不知

あらし得し思ひとぞ鳴く駿河の国にかきえりの煙なるらん

〃　駿河

侯懐ふ焼ゆるの山をもゆふれどふし比煙すかしやなのらん

拾遺集　人丸

千早振神を思ひのあればこそ年へて富士の山も燃ゆらめ

〃　天暦御製

ふりりしめかくいきつくくせのありて
友寄りふしふくつつみすべし

世の人の及ばぬものは富士の嶺の雲井に高き思ひなりけり

後拾遺集　相模

いつとなく心そらなる我恋や富士の高根にかかる白雲

詞花集　大江嘉言

日ぐらしに山路の昨日時雨しは富士の高根の雪にぞ有ける

〃　詠人ふしらず

年をへてもへてふ富士の山よりもあはぬ思ひは我ぞまされる

〃　平祐挙

胸は富士袖は清見が関なれや煙も波もたゝぬ日もなき

〃　頼實

清見潟富士の高根に雲きえて清見が関にすめる月影

千載集　大炊御門右大臣

さよふけて富士の高根にすむ月はけぶり計りや曇りなるらん

新古今集　前大僧正慈円

天原富士のけふりの春の色の霞になびくあけぼのゝそら

（新古今）　　赤人

田子の浦ゆ打出てみれば真白にぞ富士の根に雪はふりつゝ

〃　　前右大将頼朝

道すがら富士の煙もわかざりき晴るゝまもなき空の気色に

〃　　貫之

志るしなき煙を雲にまがへつゝよをへて富士の山ともえなむ

〃　　深養父

煙たつ思ひならねど人しれぬ侘てハ富士のねをのみぞなく

〃　　家隆

ふじの嶺の煙もなほぞたちのぼる上なきものは思ひなりけり

〃　　慈円

世中を心高くもいとふかなふじのけぶりを身の思ひにて

〃（自讃歌にもあり）　　西行法師

風になびく富士のけぶりの空に消えて行末も知らぬ我思ひかな

新勅撰　　平泰時

駿河の国に神拝し侍りけるに富士の宮に詣でてよめる

千早振神代の月のさえぬればみたらし川も濁らざりけり

〃　　入道前太政大臣

富士の根の空たつや今はまがへまし我身にけたぬむね煙を

〃　　　　　　　　前関白

我恋のもえて空までまかひなば此煙とや見えけん

〃　　　　　　　　九條右大臣

富士の根にけふり絶へずと聞しかど我思ひには立おくれけり

〃　　　　　　　　信實

東路は不二の芝山こえそめしだにけしぬ思ひに立けり

〃　　　　　　　　能宣

夕帰る真向ふなみ不二の山けぶりに立ぬ君を待らし

〃　　　　　　　　仁和寺二品法親王守覚

不二の山いをさでも空に知られけりときよりよ不尽申る雪

〃　　　　　　　　従三位範宗

よく共には煙は消れん不二の山けふりにかりて積る白雪

〃　　　　　　　　家隆

朝日さす高根のみ雪空晴て立もおよばぬ不二の川ぎり

〃　　　　　　　　藤原教定朝臣

時しらぬ雪にも光やされぬらん富士の高根の秋の夜の月

〃　　　　　　　　辨内侍

あぢきなく思ひ下もえと成にけん不二の煙も空にまよふなり

〃　女のもとにけしめてやる
衣のうらにかくいふなれば
へいかにとりれけり　　　　忠[redacted]岑

他人の心の内をくらぶるに富士の山とやなさるるなる

〃　京極前内大臣
年をふる思ありけり駿河なるふじの高根にもえぬけふりは

〃　鷹司院按察
いかにせんふじの烟の年ふれど忘るゝ程もたえぬ思ひを

〃　少将内侍
はれやらぬ雪にも知れやふじの煙もたちそふ言葉に思ひありとは

〃　清慎公
ふじのねの絶ぬ煙もあるものをくゆるはつらき心なりけり

〃　詠人不知
思ひこそふじの山ともありぬべくゆる思ひの煙絶へねば

〃　法印隆弁
ふじの園はさきける花のならひまで猶時しらぬ山桜哉

〃　源兼朝
よそにてもてらさぬらん東路はさらでも富士の山のふもとを

続古今集

〃　後鳥羽院
ふじのねの月に嵐や払ふらん神ゝにふけるけぶりあはれを

〃　前大納言資季
煙たつ思ひにかはらんふじの嶺も言に出せざりけり
都をば山のいくへに隔ててきて富士の裾野の富士を見るらん

藤原光俊
秋まではふじの高根に雪をみてぞかへる足柄の関

〃　藤原基政
舟よそふふじの河門に日はくれぬよもすがらやかん浮島が原

〃　中務卿親王
くる人をや恐めすらん山高みたえせぬふじの煙なりとも

〃　二條院讃岐
ふじの嶺に立そふ雲はある物をこひの煙ぞまがふ方なき

〃　正三位知家
流ては思ひしものをふじ川のいかさまにしてすまずなりけん

〃　土御門院
霧はれてふじのけぶりはまよひけりまこと物なき我思ひかな

〃　中宮権大納言
ふじの嶺は雪の中よりあらはれて埋れぬ名に立けぶりかな

續古今集　中務卿親王
立帰り見てこそゆかめふじの嶺の煙けなきにけぶりなるらん

續拾遺集　登蓮法師
清見がた月すむ夜半の村雲はふじの高嶺のけぶりなりけり

〃　信實
田子のあまの笘まで埋むふじの嶺の雪に一に冬は来にけり

〃　前大納言為氏

遠に立名ぞけりや不二の根のもえぬ思のけふりなるらん

〃　権中納言公雄

かひなしや不二の根の夕煙立名はよそに思消れなば

〃　権大納言忠信

くらべてもなほあふ不二の夕煙猶立のぼる思ひありとは

新後撰　衣笠内大臣

立登る雲にも名をも不二の根にけふりをこめてかすむ春哉

〃　鷹司院按察

むねに立つ思もあれど不二の根の煙ならねば知る人もなし

〃　入道二品親王性助

るはれて雲根は空に残されて山もとのぼる不二の川霧

玉葉集　後鳥羽院

清見潟不二の煙やきえぬらん月かげみがく三保の浦波

〃　前大僧正隆弁

めにかけて幾日になりぬ東路や三国をさかふ不二の芝山

続千載集　前大僧正道性

在いまくるまみきれて時知ぬ雪とこそ見す不二の高山

〃　相模

けふり立不二の高根に降雪は思ひの外に消ずぞありける

〃
言葉にも及ぬふじの高ねをば都の人にいかゞかたらん　二則大納言有房

〃　祝部成茂
下に思の思を空に忍ぶともふじの煙はよそにまがはじ

〃　為家
冬ながら後は絶にきふじの根のおのが煙に身を任ても

〃　亀山院
富士の嶺のけぶりの末は猶もえてゆる思ぞ消ればはてもせず

〃　宜秋門院丹後
時しらぬ思ひはふじの根いつとなく絶ぬ思ひに立烟かな

續後拾遺集　俊頼
雪きえぬふじの煙と見えつるは空にまよふ桜なりけり

〃　亭子院歌合に子の日の松を　紀友則
時志を駿河の富士の山よりも我思ひの火の先にもゆるら

〃　今出川院近衛
富士の嶺によそへていはゞ我恋のこめ有ても燃ぬべきかな

〃　為家
いかにせんふじの高根の年ふれどかくて八朱しらず下の烟を

〃　昭慶門院一条
我思ふ空に立名のありけれどふじの煙にさえ為にせず

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

風雅集　前大納言忠良

花や雪かすみやけふり時しらぬふじの高根にさゆる春風

〃　清輔

田子の浦藻塩焼は焼ぬる月日に絶ぬはふじのけぶりなりけり

〃　内大臣

高根には消ぬの上にや積るらんふじの裾野のそらの初雪

〃　藤原行朝

富士の根を山より上に見えりこそ今朝からくもはかゝらずの関

〃　前参議俊言

吹おろすふじの高根の山嵐に袖しをれそふ浮島か原

〃　詠人不知

わきもこに逢由を無駿河なる富士の高根のもえつゝかあらん

〃　惟宗光吉朝臣

ふじのねの晴行空にあらはれてすそ野に下る夕立の雲かや

新千載集　中宮大夫公宗母

けぬか上に降しけさそ積らしふじの高ねのけさの初雪

〃　為家

都出し日数思へばふじの山も林葉よりこそ立のぼりけれ

〃　入道二品親王尊円

越て来の窓のけふりに立のぼれ出る国の海にみるふじの芝山

津守国助

〃
富士の嶺にたえぬ思ひの日も忍神て我もめつらく立けりな

前大納言為世

〃
下もえの我身よりこそ立ますれ富士の煙のたくひなしけれ

右大臣

〃
時知ぬ我下もえの思ひにはふしのけふりのたくひはかりに

後京極摂政前太政大臣

〃
思ひかね心の富士に立けりな世をやふしの山にまかへて（たゝすばや（本作達））

前大納言為定

立のぼるふしの煙の行えとて心そらなる身のおもひかな

伏見院

〃
立まさるかたぞなけれふしの嶺や絶ぬ思ひにくゆる煙は

基俊

〃
路狭思の煙にむせびてふしのねもくゆるころかな

左近中将具氏

〃
年をへてもえ思ひはとけ思ひへとも神さへつきせさるらん

前中納言有忠

〃
雲は猶ふもとにこめて立のぼるけふりぞ高きふじの芝山

新拾遺集

権大納言義詮

富士の嶺の雪ははもえてきえぬせで煙や雲にやあ神らん

〃　慈鎮

晴るゝにふじの嶺渡あこえて立やけむりに立まさるらん

〃　祝部行氏

時しらぬ山郭公五月まで雪ふるふじの根を惜むらん

〃　權中納言公雄

郭公思ひはふじと鳴渡に絶るけぶりそ心中はもゆらめ

〃　有家

白たへのふじの高根に月さえて氷をさへける博ならぬ京

〃　為氏

ふじのねやも忘川とほに歎きもえぬ思のほどぞしられける

〃　常盤井入道前太政大臣

駿河なる山はふじのね我事や絶ぬ烟（烟）にもえまさるらん

〃　入道二品親王道助

ふじのねや絶ぬ煙の行方に知ぬ思ひも年のへぬらん

〃　民部卿為時

ふじのねのとをきもゆれて思ふ人や語りけるくけつらん

〃　素暹法師

神代より煙たえぬふじのねはいかゞやつもりて山となるらん

〃　左兵衛督為氏

秋冬の影そこれやふじのねの雪にうつろふ秋なき九月

〃　経信

ふしのねにふりつむ雪の年をへて消ぬためしと見ゆそこめ　法印定為

富士の根を田子の浦より見渡せは煙は空に立ぬ日もなし

新後拾遺集　卜部兼直

雪のふるふしの山風寒さえてけふ見れは雪はふりつゝ

〃　為家

富士の根は冬こそ高く成ぬらめふる雪に年をかさねて

〃　明祐法師

雲よりも上に見ゆなるふしのねの雪は何を降初めけん

〃　藤原長秀

ふしの裾をあふき見れは白雪はおほ空につくむさしの原

前大納言為定

絶す立煙よりこそ富士のねのきえぬ思ひも身にしられけれ

新続古今集　従三位雅康

西雲たつ煙の色も見れは時しらぬふしの芝山

〃　順徳院

限あれはふしの高根の雪のきゆ日もさゆる氷室の山の下葉

〃　法印慶運

足柄の山たちかくす霧の上に独晴たるふしのしら雪

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

権中納言為重

みすやいふ雪だに下にもゆる思ひさへしのびていはぬ富士の煙を

山階入道前左大臣

富士のねにたえぬ煙も心せよ我にたぐひておもひある身ぞ

法印継尊

いつはせん富士のねにこそよそへても我思ひの絶ぬ煙りを

前大納言雅言

峰のねに煙も雪も年ふりてきえぬ思ひの程ぞしらるゝ

源高国

富士の裾にて見ぬは猶も煙りまで我思ひぞつけあへぬべき

左大臣

はるかなるふじの夕烟こゝろにかへておもふ我思哉

治部卿成茂

富士の裾もそれとも知らず田子の浦の藻塩の煙空にかすみて

新続古今集　今川範政

富士のねの雪のふるすを谷出て峯にならぶうぐひすの聲

明應八年六月九日佐夜中山をこえしに一見して行くに雲のかゝりてさらに見えて侍らねば晴るをまちて一日とゞまりける間二十首詠侍る

中納言藤原雅康

法名宋世也

おほよそにきゝし物から見て知る名たかきも高きふじの高ね哉
と詠じたまひけるも御くらしと此ふもとの里にいて見らん
男山をひとつ麓にかさねてもおよびの高きふじにくらべやらせん
こゝにきていよく高しと見る人はるとかきふじの高根は
三を越せむて上も手すみ花に気高に雪とあふじの高ね見て
ふじんとよりけのことを仰ぐ何や年まはりに今そ見えける
見えふじを空まではるかにさやいて思ふさやの中山
わくきまてさやの中山中空に及ぶねふじのねをやみるらん
さまめぞく調子のみ雪はさもあらおもえにおもえさえね雪の雪
ふじのねは雲のいつくぞ秋ふれふ春のふの山の名をやかるらん

十三日列島をたちて登りけるに吉美の妙立寺にてあけぼのの
ふじ見し昨の日かさゝのに見え侍りければ
よこ雲のいくへのさとをへだてきて天そゝぐひ見るふじの曙
十六日塩見坂を見てよめる
塩見坂心ひかれしふじに見つゝつまは都をしのびこそさせ
伊せ物語中
時しらぬ山はふじの山領いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらん
阿仏尼
誰が方になびきはてゝかふじのねの煙の末は見えずなるらん
いつの世のふもとのちりかふじのねは雪さへ高き山となしけん

くちはてしなからの橋をつくらはや富士のけふりもたゝすなりなは　よみ人不知

○富士の峰の雪六月十五日の頃に消えて其夜又ふりかゝりしとや

堀川院百首　河内

足柄の山の（あしからの）手向に今日きてそ富士の高ねのほとはしらるゝ

道春駿河の国にはへりし時頼寿院藤欽夫のもとに文つか
はすつゐてによみてつかはせる歌

いく千代といはふ心を駿河なる布比くまりをはとめまくほし

藤欽夫かへし

ありてうきに我のよろこひに思ふらん峰の茶もやまてし　杜鉄

峰の雪みなひいてよ見そめし二十あまりの山すはの月
われならぬ身の上には山やたへすは名残まさらんとおもふ

拾遺愚草 二首　定家

天の原富士の高ねは山なはくしのへりるへせす雪に冬たえぬ
都人かくやつきしもまふしらぬ雪は外の山ろとわくらむ　西行

風になひく不二の煙の空にきえてゆくへもしらぬ我思ひかな　同人よみ

山の端の雲をつらねて不二の根に帰る鵜なかく多かる雲　光俊朝臣

夫木集

むら二字がふひ駿河の国中にて四方に見えたる山はふじのね

詠人不知

ふじの山ひとつあるものと思ひしに甲斐にもあるてふきこゆるかなもありてふ

民部権少輔相高卿

冬晴雪

吹おろす嵐なれども一むらの雲さへかからぬふじの白雪

吉田朝臣

名所山

ちくひちはいつのよりのつもりまで谷やたかき山はふじの裾

能因法師

御坂ふじ

御坂路にこえかゝりけるからこのねのさながら空も見ゆるのど

加茂季鷹

ふじの裾野そびえつゝ今のある山は高ねの名とありなむ

青島定賢

こさか路のまだけのふじを見ぬ程は目にかけて高ねありとも

同国雑記に書を見るにいはくふじの雪とふそはへれば七月は二月十五日月いとかすみてふじの雪さながらにきえさりぬれ

ばよめる

聖護院

きさらぎや霞の月のかげをみて富士も雲井にまがふれて

加茂季鷹

日の本の国の鎮となりてふ山路はあまねくてらすなる

寄原

二條院さぬき

ふる雪に峰の烟はうもれてもふしの鳴沢こほりぬけり　法眼全貞

〃

いかはかりふりつむ雪のふかけれはきえせぬふしの鳴沢　権中納言公維

〃

しみかなるふしの鳴沢風越へて清見か関に猶おりつゝ　俊頼朝臣

〃

さ美みれは雪鏡ともろともに鳴沢ふしの志すはなき　俊頼朝臣

〃

山深の音にさはさのこゝろのみち中夏晦日ふしの雪也　源氏真

夫木集　後鳥羽院

富士の山おなし雪嶺のこゝ絶よりまそのふわけて登るそまる

万葉集　よみしられ

ふしのねにふりおく雪はみなつき望にきぬれは其夜ふりけり　高橋連虫麿

ふし嶺をたかみかしこみ天雲もいゆきはゝかりたなひく物を

一家集　伊勢

きていこのふしの山もと飯ぬるもゆるおもひの烟たえねは

〃

人知れ思ひするかのふしのねそふもとゝそふかしにそもゆらん　貫之

〃ゆきをも消しだになけれ富士の嶺に思ふ中をいかにせよとか覧

ふる夜まてなにたつるのの山越人こそかねてわかれけれ

〃　清正

世の人の思ひかけてはふしの山ふもとにたてる思ひなりけり

〃　重之

煙人はあらしと思ふふじの山雪のうへより烟立そて

能宣集　こゝろのちも富士の山なき　まよふ人のしるべなり　能宣

富士のねにもゆるけふりのほかりて火とみるはふしのけふりなりけり

なるなり(采抄)

堀川院百首　顕仲

わきてくれぬと人はきけ共道そけはけきふじの芝山

〃懐　兼昌

ふじの山みねなる雲はたつの煙のやかてふりかゝるかな

六百番歌合　中宮権大夫

ふかく思ひ入人やふしの峰の絶ぬけふりとへはしめけん

山家集　西行

烟立つ川ふしに思ひのあらそひてよしなき恋をするゝへきかな

拾玉集　慈鎮

ふし根の雪解の雲はふきのけて出たる月の初風

見えてかきみはけれ富士の峰は煙そ春の名残なるへき

秋風にふじのけふりのなびきけれ峰たつ雲の空に消ぬる

君かよは清見か関にちりひちて富士の高ねに雲こゆるまで　俊成
詠藻

五月雨は箱根のこのこちかけてあかきそ富士のしらね成る　業平
名寄

人もまた山をみのねいつとなくたつや雲のはれやらぬらん　為相
〃

舟とむる田子の浦てらの夕塩に富士は浪まはきりこめてけり　康光
〃

うつしの山峯は雪きのこるふもとのみそに秋風ぞふく　家隆
新六

清見の富士のたかねの雪は時うつるもや雲ゐるらん　為教
〃

するかなる富士の高ねのふもとのみゆ雲はゆきはるかに　顕輔
〃

秋きよみ雲の高ねに雲はれて清見か関にすめる月かな　鴨長明
夫木集

秋の田の風にたくよふあきとも見えぬ袖をうつ月見ゆ　後言

吹おろす富士の高ねの嵐風に袂のあはれ袖も寒きに　権中納言
夫木抄

三山には松の嶺よりくもる雲にすそのはらはれぬさむる空

〃 屏風絵に炉のけぶり　　詠人不知

△ ちかくさしまつつけたる松もえたぶみとは風のけぶりなりけり

〃　　参議為相

時しらぬ山の煙をはるかにみの月の高ねやくもるらん

〃 二期百首御歌　　後京極摂政

積もる雪の煙しかなきもの故富士も懐にたなびきつゝ

〃 家集　　従二位家隆卿

富士の嶺や岩もとにかすくらし　あさまの雪のふもとの月は

〃 正治二年百首御歌　　後京極摂政

富士の山ふもとはやそ降る雪のしらねも高くなるそ空とをき

〃 建長五年毎月一首中　あつまかたけるとき

富士の嶺に山おろしさえてこよひはさやくれをわたる

〃 嘉元三年撰恩百首　　為実朝臣

富士の嶺に在しもさくら峯なれは雪にまつ[illegible]ふりかさね

〃 信為のけふそ　　他阿上人

霞たつ山の高峯はれわたるふもとの雪はけはつきたり

〃 貞応二年百首眺望　　為家

うき志ほのあふうらなきへたゝてふれもなくふじの山

新古今　高山待月　　為家

よものうみの嶺には雲もかゝらし富士は猶高き秋の夜の月
嘉元百首（新続集）　俊相

いく年か雪やつもれるふしの嶺にけさもかゝれる足柄の山
新後拾遺集（仝上）　宗久法師

武蔵路はきりのはてある日数かな富士の根ならぬ光見えけり
拾玉集（仝上）　順徳院

富士の嶺に一むすひてこそ出つれ二荒山とめて見る空ぞありける
明日香井集（仝上）　雅経

時しらぬふしの高嶺の中はれて夕日のうつる雪の色かな
新明題和歌集　雲清院　宗敬

新撰六帖

ぬれぬるのあたりの思ひは富士の根も雪きえぬまもこえけり

見渡せはこゝねあけゆく富士の山たなひくや雲かゝりとめなん
延喜三年亭子院歌合せのうた（夫木集）　一宮資子内親王

恋はふせをたれかさそはぬ富士の身のあはれおもへと
建保四年院御百首（仝上）　慈鎮大僧正

思ひいなるやみちのくの煙は富士の山ゆつりし
前中納言定家

いはでおもふかくるまつ八重の流れみなかみのうちけぶりめん

百首歌の中に（今上）　入道前摂政太政大臣

時しらぬ恋はふじのね世とともにむせぶ煙のもえてつきせじ

（新代集）　清慎公

ふじのねのたえぬ思ひもあるものをくゆるはつらき心なりけり

新葉集　前大納言光任

ふじの雪のはてしもなしや峰の雪のいつまでつもりぬらんなるらん

〃　よみ人しらず

ふじの山もとにゆかしと思ふかな峰のたかねの雪をみましを

〃　百首歌中に　後村上院御製

いかばかり高ねをこえてゆくらんなるすその道ははるかなる

〃　題しらず　よみ人しらず

誰ゆゑにわが思ひもたえずけるふじの嶺のけぶりはゆるかりける

時しれぬやたえぬおもひの煙さくらさきのみなむくもらん

御製

煙こちゆとみゆる富士の嶺おもふかな思ひかねば

治承五年五百首人家の歌　俊成卿

見ゆるうちをみるまに海も晴てふじのねの雪もそ見えし

鎌倉右大臣家集

見わたせばさかりけるかな雪もちる富士の高根のあさぎりの空

〃慈

富士のねのけふりも空にけぬるをなにゝ思ひのたくひとかせん

為家集

一富士山二首

名にたかき富士之山もきえぬとも空にそしるき雪のけふりは

浦こゝ山よりうへの富士かねは消せぬ雪に文を成けり

〃高山待月

すむはねのこゝろかはらぬ影もあれや富士のねにしもすむ月

六百番歌合　家房

君ひとりかの空になつけなり世をやみの雲にけふりそへく

〇草庵集

浦富士

帰るさの稀はこそみゆる田子の浦に雲打いつる明ほのゝ空

〃ふん

晴もせん曇りはいつそふしの根のたえぬ思ひのけふりなりとも

〃金蓮なるも名所よみ侍しける

さこの浦は海はるかなる松原をふきかへす高根をそみんなる

〃陸奥守頼氏合せし

東路そ見へはこゝまかれぬの杉野にても見ゆる富士の白雪

〃雲霧中の眺望

都にも見やかゝらん大空にあらはれみゆるふしの白雪哉

○伊勢海

うち寄るに 順徳院

関こえぬ山はゆきけのくもゐより有明の月のうち寄る京

不盡山 公

姨の裾にもさそもかくれなきこちへゆきあれぬらん

○東帰親房卿集

永享五年内裏歌合に

いはとふくいくさ我こしやまのふもとにかすむふしのしらゆき

草菴集

田子浦や富士の高ねのかけみえて照にこゝろの高ね

従一位左大臣源義政 東山慈照院殿

義政公集

路次記書

宇津の山は越ゆるを忘れぬ身なりけり富士の高ねのはつ雪の村消

大閤記にいふ

夫より路の道清見につゝきの清見かたの大輝も老人玄沉

其たりけり

三保の松田子の浦の月富士の高ねの雪明の眺望詠ふ

其奥猶可也

名月あふ田子の浦の湊にかゝりてきて見ん浪の白雪

国立国会図書館 タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

ちなるの雪峰まで　傳空坊

信濃なる衣か峰に来て見れは富士のゝえおくあまた詠み

ちかめて女のもとへやるとて（其文のまゝ）　堀河院艶詞合

人しれぬ思ひをつくばねのみねにのぼりをぬれといふよ

女之返し

はつかにもぬるゝゆふべのみねの山をおのゝの思ひに誰もふみん

たかねまて見えし雲ゐは山の末やそちら上のやまふみのね

題しらす

仏国禅師

いつくよりわかれし空に久方の雲に隠るゝ富士の高山

新明題和歌集

みの裾の月にきもをちこちにみえる雪の裾にさやけき　常敬

〃名所雪　隆慶

思ひやる雪の高根にいかならん都の山の千餘のふもとに

〃朝見雪　資慶

みえへやけさそさやけき白雪の月数くる裾野の山の雪

〃　良尚

緑かけ山のいつも時しらぬ高根の雪のさくらぞさく

〃　通晃

ふじ見るそこのとく夕煙立は後はしむ衣の雪の

〃富士　基熙

そらにふくあまりの年をこえぬれど富士は人ごとしろきひとかな

幸仁

〃

末久かねてをとろへぬ富士の根はまた見えてしかり

道晃

〃

しほりける霞立きぬ富士をもきてなかくふもとの白妙

通茂

〃

不二の根はたゝふる風に照まして山の雪にも

思ひいつけるもいまの空にふたとえて山をえらまし富士の称

〃

雅章

大方は猶てふ積めぬ神代より詠めにつもる雪の白雲

年々にめつらしとみるめの裾にはれぬ雪のつもるらし

給へりける雪の高根に積ひてはるかに霞みにあそびし

ことはみなふみとかたて人々の言とふ富士の山はふ

名にしおはゞ山を三十四そへあけてかこの上にかゝるべきやらん

富士の根は年々にて雪はん見えく雪は山つくるとし

〃

大かたの雪はおほく色にあり世々の詠めの大和ことのは

光雄

通茂

護りつゝ山ひつ冬や淮へき言の葉になるゝ雪の高根を

大田道灌和歌集

むさしのゝまさひとつの隈より空をこえたる富士の白雪

○鳥の跡

山雪　河野八左衛門照京

時しらぬ山とたとへは吾妻ては雲に消る富士の白雪

〻武蔵の江戸にて詠ける　宗元君法師

けふまで富士の嶺にかゝる雲めぐりておそき春の日

〻卯の花

富士の根の雪かと見えし花の後かゝる雪やふる卯の花

〻雪　伊奈玄蕃友山高

白雪

世を何と思ひなれさへかりつゝて武蔵野や富士の根ちかくもつゞき

〻富士を詠ける　山名主殿入道

富士の裾の野へは猶はれぬ雲の尾をぬ麓にふりき雲

冬ならぬ山のひかりの色をまつみるとそすむ富士の白雪

〻　読人女　土岐家

志そとて立はなれつる総房ま武蔵野かけて富士の雨かげ

〻法国行脚しけるとき　むさしのより富士を見ん

そくよめる　梨本残暁

武蔵野をこえはぬ江をぬきそ富士のすかたを終日にあらん

終日の富士まてそ　仝

吹かへす松のこゑには雲はれてふしのねおろし山風

浄光院法印尭孝集

山

あさ世にも世に風はをさまる人もかの煙のたえぬ道とて

○宗祇回国記

すはま白といふより富士の高根にいまだ雪ふかきわけて
よそまで行山の雲をふみわけぬ浮島を神にまかせてし
ふじの山いつくしき姿の跡をとどめし
さら雲のひさしくて姿を保ちふじの高山
田子の浦を詠めやりてよめる

くさとをりまはふつくかの雪のゆきのかとや田子の浦

冨士の煙をよめる

久かたの天の川瀬にこゆるなりや雲にむせぶめの煙

大ゝ　甲斐歌

かひがねをさやにもみしかけゝれなく横折ふせるさやの中山

甲斐がねをねこし山こし吹風を人にもがもや言づてやらん

もつ岩橋山　　知竹

ふしの根にかゝりやりんとちのくの岩橋山のまゝの渡

薩摩頴娃郡

薩摩潟えいの郡のうつしけりまさにやつしの富士とみん

ふし山に似たる山ありときゝて　　信海

卯花のかきねの様と雲を見てあつまのふしの山郭公

元禄十五年五百首の中

松か枝に私さしよせてふしのねの雲をしたくに三保の浦風

〃

いく千里さかひ隔て照すらん名高に近くふ雪のふしのね

年のはじめに　千蔭

東路に先くる此日のかけを雪にまちとる不二の芝之山

正月朔日不二山を見てよめる　士麻呂

けさよりぞまさしは花の色みえて朝日ににほふ不二の白雪

不二の裾をふりさけみてぞあふくなるたかくたふとき御代のけしきは

早春　千蔭

消きしぬる雪なからに不二の根は霞に白くふきたちぬる年

初春山　枝直

東路や春来にけりと出る日のひかりまちとる布引の白雪

春浅来

かくてふりさけ見ればとくる此は不二のたかねにたつかすみかも　春梅

霞

不二の根のをちこち人をへたてそめて霞はかけ代

又　重門

春の日のうき雨にたなびく不二の嶺は先袖にほふ見てそ霞み

山霞　其蔭

立こめし雲に霞をつめてかすみとはいへる不二の芝之山

附なかぬ雪は其白いを隠てあかふうつ送不二のえぞ山　朗

春ふかき高根も雪も一つ色の霞に消る不二の白雪

霞隔山色　千蔭

ふじの根もふもとにつゞく野山もかすみてそらにかゝる也けり

正布目の山をみて

大かたの霞はみちもおよばぬと春のひかりに匂ふふじの根　千足

山ざくら

春ごとにふじのたかねの山桜紅白の匂ひあやにむらしも

五月の庭ありける北山の雪をみて　東麿

むかしおもふはらのまごゝろに見し人のかくさへ雪見しふじのね

いせ物語の不二の山の詞に　大秀

ふじのねや雪しきつきの庭となりにおりしみ雪の詞もきこえせ哉

題しらず　千秋

ふじのねの雪もきゆとふ五月のもちのこよひはあつけくもあらず　土麿

白雲遠望

ふりさけて見ればまさしもみな月と秋ならそふふじのしら雪　正庭

月

吹きはらふふじのたか根をいづれとも月は秋なる光なりけり　直道

まくれのあきもいつまでと見し月の光をかくすふじのしら雪

光さへ都にかと見えてふじのねの雪にかゞやく秋の夜の月

いつとても清かるものをふじのねにあらふいきえし月のしら雪

山月　　　　　　　　　　　　枝直

秋の夜はそのとめさや富士のねのけむりもたゝずぞありけむ

　　　　　　　　　　　　　　磯足

さはるべきこともなしとの富士の根にたぐふ月かげ秋のよの月

山月明　　　　　　　　　　　枝直

ふかくのみかけみるも富士の高ねの雪にさへまさる秋の夜の月

富士山月　　　　　　　　　　千秋

たかくそびえたる富士のねをやよ照して出る月かも

　岡部日記のうちに　　　　　真淵

駿河なる富士の川をわたりけるとて高根に出る月を見てよめるに

八月十五夜　　　　　　　　　種足

今宵こそ秋の空なる富士のねの雪の色には月もさえなむ

富士山時雨　　　　　　　　　宣長

駿河なる富士の高ねの時雨るれ降る雲は富士のふもとに

富士山雪

東路やまた見る人も一たびにぞ見んずる富士の白雪

志ぐれふりの日富士の山をみて　　土麿

夜なくらぬ富士の白雪は空はれて今朝ぞやあらむ

よそながらかげの雲も富士のねのふもとまでやつもるらむ

いひをしむ　　　　　　　　　有豊

天の原ふじのたかねの雪の色をしらぬ人にいひそしらなむ
春庭

寄烟恋

たちのぼるふじのけぶりを見てもしれ又うへもなき思ひありとは

寄雪恋
朗

我恋は駿河に我も見えねどことはにたゆまずふじの白雪

山

天の原ふりさけ見ればふじの根は雲井をこえぬ白雪ぞ見え
民子

名所山

たくひなき山なれは道標ふじ比ねいた大空の物とおそれん
ふじ山
長流

ふじの根にさしき朝日の見えそめて後ぞあづまは名ぞおこる

ふじのねに登りて見れば天地はまだいくほどもあらざりけり

ふじのねは天の河せのちかければおもひ雲井になる浪の花

今にそのふることをぞ言ふ竹取の翁にいひてふじの世之山

日本なる山はふじのねいつとても夏比さかりに雪やふるらん
枝直

天のはてる日本近きふじのねに今も神代の雪はのこれり
千秋

去除のあさふじの高根はたちのぼるひくき上にも雪ありける
中養文

四方の雲吹は払ひぬとふもおもえぬ空に晴るゝふじのね

名さへしと近江の人にあふがれなふじの高ねは上もたふとし

磯足

契沖

ふじのねは山の名までに二ま涕ぬ空にかけたる雪ぞきえぬらむ

都まで心のふもとにふじのねはめとをらん[illegible]とありけると

言の葉とおもむきをゆてぬふじのねは我おさへにかたときありけ[illegible]

ふじのねにおほよひて向ふ山の〜のあやしき歌も雪をのつ

ふじのねの煙のそちふこえ山は雪のひかりに名やはぬくし

此をさて山はあるまいそふじのねの雲の井よ千のちゑをいたしし

ふじの嶺の絶ゆるまあり見えぬ雪の高ねは

真淵

山ぞはくもぬる雲の空にふは峰をのこしてふじの白雪

羇中眺望　宣長

ふじのねは雲のうへまに見へそめていく日になりぬ駿河路の旅

百人一首の歌にてふじ此山をかくしぬる論に

見恨もなみちはうちの言の葉ふ我かさ〈ゐ〉あげたるふじの高嶺に

富士の山のうたに　猿彦

田子の浦やうち出て見つるふじの裾に言葉ひらるやすと言の葉ふ

うたてふのはらけ　長流

かきけちぬ雪をふせぎをのせのあさへやふじのねに面ひれけむ

百富士画賛（巳下五首共）

隅田川　　宗朝

ふじの根の雪にかゝれるうき雲はやがて園家の里にしぐれん

雪後　　広定

さえてなほその名にたかきふじのねの雪の上に見ゆる山の雲

玉川　　宗信

ふるさとの布さらすてふ玉川にうつるもしるし雪のふじのね

駿府　　景員

するがの路やひさの都にみえればかをきなぶ山高きふじのね

松の嶋　　源公忠

むかし世はれていづら時見るにさやりもふじのねの

雨はれの中をふじに雲のかゝれるを見て　　高橋石足

住よしの里人のいひなくあさは雨ふらんみねの白雲

清水濱臣

日影さすふじの高根にうつる程そ渡るはゆけ川口の湖

西行法師の画　　よみ人しらず

わきとてはこゝかとぞおもふすゞひろく空に見る高のふじのね

伊近江　　元政

このよにも心にかゝる雲もなし　ふじの高ねも雪までにみえつ

詠富士山百首和歌　廿首抄出　翁に　　栗門契仲

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

なみこ川やましろねにめでけるをかしこまりし人ありけるが　みやしき山
はのもとのえにをしまめてうたひなむしたる言の葉の帰洋の名
そもまくえん言えるあれどその名かるれはまさりふさてむをかしうせしめん
ふるきえの三首を伴ふしふの富士は雪のかうこにめでたくかしこふと海
あめつち此様はひのもとを定めなりといふねはことにあれ在りし山
みの富士のけしきをえとはそめ見え此山乃こゝろみてひの本なりけり
ゆのふじのあらましほすうちくてなをあふげやゆきのすゑしきれ
わすれぬ安らぎ年やちはやふる神代の雪やまちふましきれ
めにけみてかみもさぞあれ日本の富士のこゝに大かつをはしはしゆかし
ゆたかにつかはかさて我が富士ならく見しぬあのさとやる

おほのみかくれてかの富士はくれなゐの雪の花のし
へをとめその陛を儲わたけしをとなる帰洋のこゝろ
ありかたきはいつてはあれとも我の富士の峰ある人をこそめでしるれ
不尽すねはこそなにいつもかげなき人の影ありそめけむ
みなるまもてふる追はめるみ富士はこゝろにかゝるとものかけなし
富士の根のあぬ思ひ出発たてまれありにまたる峰のぬきとまぬ
白妙の人々をふしとかの富士の雪のそらにひかむてふぬし
ゆく此絶代なるはつき此花のえ見はさふりいふてはゆやん
ふるさとの峰はなれにかの富士のたけにまめはなかほてとくる
ふじの根のをおしはらぬ大空にそゝりのくの記しなりけり

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

くち惜の雪ならはきえなましを人そいひつくふしのたか根を
夢よりもなほいとくるしきふしの煙ねをおもひける
ふこの浦とおもはれしらぬ雪のめにしけれしめつゝ清はふ
やまひとのはたゝりの瀧にやまれたれたまふの富士は
こゝろゆく神のたもとふかきの海清はつねにやふしのふし根は
旅人のおもひをぬくまりあまた根みちやまのたかみゆきし
女神ともや雲はれは名をおもひぬ紫式部のねの富士の根すて
ふしの山のたかねはこゝろに河をみけはれ山の煙そおもひぬ
はるかすふしのうちなるしらぬ山もふしのさねを雪とそわたりけり
ひさかたの空にみよ山はやまと神は峰のさねを消せてとこしへ

富士の根を雪けれはけて清見かたにたますふせきの名をそ立らん
ふしのねはあれぬるかれなきはなつそけれとも若葉にかけん
根をもとしらぬ葉茂ふる根のはつしくも神はつゝあるの峰を
ふしのねのかゆうつきを清見のあまけれはたなひやりけん
やまの人のやとの玉松それそくしもふしの氣をたふあはれかな
峰のねのやまのうちをゆるおもひをはくちそふぬ清見の浪
ふしの山の風になひけむ旅人のこゝろにも御使にこゝろふかし
はるかなるめにいぬかるゝのけふ立ちの鴈やあすのやまにとゞまら
かくこのとふとみる川こそれ根をたかすめのやまなるを
かくれけるしまてそめてをも出しるかくるゝふしのね

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

不尽のねにおりし天女かねとてやいつのしら雪
さこの浦乃あまのたえまもなしとほかにみのかさもなき月見よかし
富士のねをみねにはなくはゆくらむ影にうつりしと思ふなりけり
あまをとめ袖うちふりし富士の根にたちまふはれあまつけ見
うらしまの天のねむらちきりにしきはみのしみありけむ
やまと人みなみてかくしくにことにいはまほしみくにとゆかん
あめつちのはるかにみえし富士のねをうちさかのはなをあふかくに
まさめ人のこころのみのねは清けるしくそもとめしけれ
いにしへのあるとにねのまなは雪と見えてしあるつみに
富士の山はねをかくれなるにおもふこと富士のさし

鳴海なるをへてあきつ島のみやに富士のたかねを見れは
こよひのそらにうつりてさかゆる富士のねになかゆみね
なかきけふもわかれし世をのみもあひかたくしほみにゆかん
みよしのの出ではまとして富士のねは人こころやはらかん
あはぢはなちにし人のいのちけてゆくにかくしき富士のかへり
なかき世にのほり月みなからいとはふしのねのたかさやふらむ
月も日も光をさしうつくしのやまにうつりてかくしかねたり
なかきたひのわかれてみのほにおもふちのやそむかふさし
富士のねにふりしくのゆきとしとも見えてあまのとへもかくらむ
富士のねにちかきなかれたるはの河はおちてゆくよ

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

富士がねのくもゐより出て見えけるはおほかたならぬ山
まほなるおきさとより見る波にうかべるふじのしら山
白山と見て過こしかつらきにふじのしらねそうつるあやしき
かきくもりてなほあかくもふじのねを見しもはれゆく空の気色
なりけり　あめのわけにたちわたる雲のたえまの月の影
富士の裾をつらねてみゆる雲の中をわけてあめのこゝろ見ゆる
やまひとつかくれの見とめて名残さもなき月のね
高嶺はふじのねのなかにもなほちかき雲のおほかたの山
みわたしの道はふもとにふしの高ねの風ぞあらはにえやはしらる
ゆふたちのまよふらるまさしくふじの高ねをうつゆきぞふる

きよみがたせきよりあなたにみえぬふじのたかねこそやどにとゞめぬ
時わかぬ雪のあけぼのいろのかずかずのこゝろにかよふ月影のはれ
ひさかたのあめのしたにかみよよりたえずやくもしくふじの高ね山
ふじの裾をはるかにあふげばたえぬひとむらのかすみにまがふ雪ぞのこれる
そのすそにかゝる雲はらゝくなるはみねの雪はしろし
富士のねをみればくもゐのほかにもとまるは雲のうへなる
時しらぬねのしらゆきのなかにたえぬけぶりのたかねに見ゆる
雪ふる日とのくもゐにみゆる富士のねぞひかりそふ
あかねさすあさひのにほふふじのねにあやのにしきをかけてみゆらし
ふじの山をはるかにまちてけふ見つるにしきのゆきぞのこる

芙蓉峰にはへぬ煙のたえまよりかゝりそめては雲はなれなん
河水に銭ある雲にやかひの彩めを見みえそめてをかしかる
をやこ人清さ道てふ河のねをみよまゝ日そわれあり行る
其の海は大てせこもれやれもかりのかたちのゝ雲を
天の原日西ふそはひきうてもあをにゝ河のすかたはうつるにをりんなと
くれにけ井の雲はれぬまゝ日にそはひとのきこゆるの寡
河ぬ様をかぬ影をやつゝ思ひは年めし竹立
あまたたる雲のあれ様にて春さへき流ても川の水
なかてふことにはたけにあやうの様は燈河のさたかや乃
冬ぶりの雲もくのこくにおちるいなくおもしこれやふるの日

な清人のいとくるはやふ河のねにまゝゝ神の中をえんゆゑん
なりきちかふはなふ河の様を油絵ものはかなれをきり竹梁
ゝりしふ山もかけるぬ山よりふ河のねにふみ知かふたちける

香川景樹

大空をてる日の影もかれて鮮やかなる河の雲のみ
計る峰に初雪ぞ添ふ歴ひめ慎ん富士様やうこてん
すゐふなる河の峰はてゐるくみ雲ふ井にかんえ佐保哉
風のふき立ちけれやつゝけん雲には見ゆ河の高ねは
河の峰に打向ひてはいきき山の形きく人見しとも思ふ
はふさ見てゝく井に並ひ河の日の智をくわの傍の松原

空の海この深閑に浮すきゝのゆくりなき舟の芝山

道遊集 一名貞恒家集

雪眺望

山高く人はふかく晴ねの麓にちかく頭の雪

條舟雪

晴ねやら共ならぬかゝる雪ぞたゞこゝに見ゆるあそこなみへ

山

まうらゆりし神代の望やしぐれても猶いたゞきの山とあるらん

因乃恩集

六月朔の日布士の山をみてよめる

見れはやの不二の高根に霞めてやそか國に其やさらん

然ふりそ待にて絶の流へて飯田あれはに富士のうち雪

布士の後をかさけ見つゝあふくさてくまの代のけりきそ

いはら夏望

布引けて見ればすゝしくみな月のその殊なるに布士の白雪

いはら浪のこと雪の歌よまける

冬と秋と雪をかてもしみ田甲斐ら後や布二の夏ねのとこめつるもの

師走の都に無陸の日布二の山をみて

世界かけぬ山の雪は年都にこそ知るべきやあるらん

とさえば行きの雪も此様の下くやつ見るらむ

○暮村望

ふじの根は夕ゐる雲にこえいれてみゆるのみなれや立かへりなり

○布士の山を霧のへだてゝまがきをもとめつる

大かたの晴わたりたる不二の根も霞そめたる空の雲まに

○小野古道歌集（長谷川謙益といふ）

かるやかなる心をおもひて

ふじのねにかゝるみ雲はしみ山のつまるにこゝろもやさしくらん

楫取魚彦家集（伊能茂左衛門）

六月の暑き日に旅立つ人を送りて

みな月の望ちかきにふるぬとふ ふじの根も雪はけぬらん

題しらず　春水

富士の根は雲にかくれてひさにちかへる陽田の春の霞けり

下條保彩

雪はるかなる雲の上の峯は天つ空の中にたゆたふますらを　玉

まるゝまなくすぐるふじの根の姿はるゝ世の中の人

内藤存守

ふじの根の雲はへだゝりし井から祇野をうけて三條の松原

塩田友親

永弘

くもりなき鏡の帰から見ゆる富士のうつけしや不老の花なるらん

富岳に登りて　三千風

雲の外月の山をも今こえて夢とぞ思ふ富士の曙

同じ題を　宗牧

昔みし月や雲井にかはるらん君がまのあたりにみるべき[illegible]

見つるとをさがるるにうつるやみや[illegible]富士の山にかゝるの根

題しらず　よみ人しらず

跡ひすそ野に落の[illegible]富士の雪

二條の院にて　梅君子

こゝろとくは空にゆきくてきえんを出来けるに

きのふをきの[illegible]三国に高き[illegible]月日まのその山は高ねの

清見がたまでこのたびくちをそへ　よみ人しらず

かりそめに見るも富士の雪にしと[illegible]清見がた

はるの天　嘉隆

うつろふ月の[illegible]にゆきいえいの[illegible]

朝を[illegible]かたくし[illegible]の山きえせぬもの[illegible]

蒲原の宿にて富士を見て　義湾王子　琉球

[illegible]なき山をいく[illegible]ながめそれぞとしるき雪の根

(井蛙抄)　信都何り

峰の山[illegible]あるおもひ[illegible]

(千蔭翁家集)　橘千蔭

[illegible]の子

東路にまつ見るも日のめんを雲より高きふしのせな山

一子蔭房穎室主

早春　橘千蔭

時しらぬ雪なかりせはふしの嶺に鹿子まだらにふるらん

山家上霞

足柄や岩根も桐しげあらしにておよはぬふしの柴山

樵雲

甲斐かねのわかなあふきとし雲にかかれる雲れきゆる[illegible]

足柄山桜さくりふしに降るらし

足柄のいまや山桜さきにけりふしのしらねこえる計りに

田子の浦白浪ありふしの高ねに

たこの浦や行白雪ふれるふしの嶺のたかすかたを

冬眺望

まつ川すみの村あしうれふしてうしろね雪きゆるらん

山

あつまのやのそ[illegible]ふしのねは雲ねなり

不二のうし　六人部是香（百首歌）

不二うつすもろへ[illegible]きえあへぬ雪より[illegible]

国立国会
27.4.10
図書館
265053
国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』　請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会
27.4.10
図書館
265053

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用